

茨城県教育財団文化財調査報告第472集

茨 城 町

向 遺 跡

主要地方道水戸神栖線交差点整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

令和 6 年 2 月

茨城県水戸土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団



茨城県教育財団文化財調査報告第472集

茨^{いばら}城^き町

向^{むかい}遺跡

主要地方道水戸神栖線交差点整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

令和6年2月

茨城県水戸土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県など各事業者からの委託を受けて埋蔵文化財の調査と整理作業を実施する組織として昭和52年に調査課を設置して以来、数多くの調査を実施し、その成果として調査報告書を刊行してきました。

この度、茨城県水戸土木事務所による主要地方道水戸神栖線交差点整備事業に伴って実施した、茨城町向遺跡の調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、江戸時代以降の土坑や溝跡が確認でき、当該時代の土地利用の一端が明らかになりました。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、調査から本書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります茨城県水戸土木事務所に対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、茨城町教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

令和6年2月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 川 股 圭 之

例 言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が令和2年度に調査を実施した、茨城県東茨城郡茨城町大字上石崎字上ノ坪2314-2番地ほかに所在する向遺跡の調査報告書である。
- 2 調査期間と整理期間は以下のとおりである。
調査 令和2年4月1日～5月31日
整理 令和5年11月1日～12月31日
- 3 調査は、調査課長酒井雄一のもと、首席調査員兼班長埴厚宣、次席調査員内堀團、埋蔵文化財指導員樫村宣行が担当した。
- 4 整理と本書の執筆・編集は、整理課長本橋弘巳のもと、以下のものが担当した。
調査員 近江屋成陽 令和5年11月1日～11月30日
調査員 市毛美津子 令和5年12月1日～12月31日
- 5 本書作成にあたり、茨城県教育委員会総務企画部文化課主任文化財主事栗原悠氏、同文化財主事加藤千里氏の協力を得た。
- 6 当遺跡の出土遺物と実測図・写真などは、茨城県埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅱ系座標に準拠し、 $X = +31,400\text{m}$ 、 $Y = +56,040\text{m}$ の交点を基準点(A 1al)とした。なお、この交点は、世界測地系(測地成果 2011)による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1al区」のように呼称した。

- 2 実測図・遺構・遺物一覧などで使用した記号は次のとおりである。

遺構 P-ピット SA-柱穴列 SD-溝跡
SK-土坑
土層 K-掘乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は300分の1、各遺構の実測図は原則として60分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
(2) 遺物実測図は、原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

■ 織織土器断面 ■ 須恵器断面 ■ 貝分布範囲・鉄滓分布範囲

- 4 土層解説と遺物における色調の判定は、『新定標準土色帳』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。また、土層解説中の含有物の量、粘度・締まりの表示は、次のとおりである。

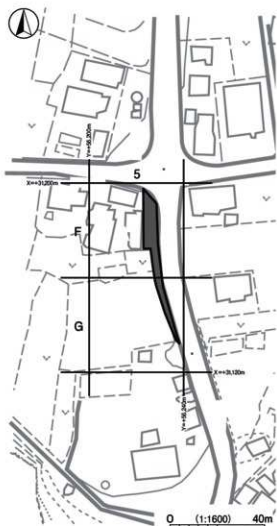
ローム-ロームブロック 焼土-焼土ブロック 粘土-粘土ブロック

A-多量 B-中量 C-少量 D-微量 ○-極めて

サイズは「大・中・小・粒」で、炭化物については「材・物・粒」で表記した。

粘-粘性 締-締まり

A-強い B-普通 C-弱い ○-極めて



調査区設定図(茨城町都市計画図2,500分の1に加筆)

- 5 遺構・遺物一覧の表記は、次のとおりである。
- (1) 計測値の単位はm、cm、gで示した。なお、現存値は()を、推定値は[]を付して示した。
 - (2) 遺物番号は遺構ごとの通し番号とし、本文、挿図、挿表、写真図版に記した番号と同一とした。
 - (3) 遺物一覧の備考欄は、残存率、写真図版番号とその他必要と思われる事項を記した。
- 6 遺構の「主軸」は、長軸(径)を通る軸線とし、主軸方向は、軸線が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。
- 7 整理の段階で遺構名を欠番にしたものは、以下のとおりである。
- 欠番 SK 1・2・9～11・16・18

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 位置と地形	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	7
第1節 調査の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	9
1 江戸時代以降の遺構と遺物	9
(1) 土 坑	9
(2) 溝 跡	10
2 その他の遺構と遺物	11
(1) 土 坑	11
(2) 柱穴列	13
(3) 遺構外出土遺物	14
第4節 総 括	16
写真図版	PL 1～PL 3
抄 録	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

令和元年5月8日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに主要地方道水戸神栖線交差点整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、令和元年6月13日に現地踏査を、令和元年9月5日に試掘調査を実施して、向遺跡の所在を確認した。令和元年9月13日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、事業地内に向遺跡が所在することとその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

令和2年2月12日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。令和2年2月19日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、現状保存が困難であることから、記録保存のための調査が必要であると決定し、工事着手前に調査を実施するように通知した。

令和2年2月21日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、主要地方道水戸神栖線交差点整備事業に係る埋蔵文化財の調査の実施についての協議書を提出した。令和2年2月25日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、向遺跡の調査の範囲と、その面積などについて回答し、併せて調査機関として公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財調査事業について委託を受け、令和2年4月1日から5月31日まで調査を実施した。

第2節 調査経過

向遺跡の調査は、令和2年4月1日から5月31日までの2か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程	期間	4月	5月
調査準備 表土撤去 遺構確認		■	
遺構調査		■	■
遺物洗浄 写真整理		■	■
補足調査 撤収			■

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

向遺跡は、茨城県東茨城郡茨城町大字上石崎字上ノ坪 2314 - 2 番地ほかに所在している。

茨城町は、茨城県の中央部よりやや東に位置し、北部は水戸市に、南部は小美玉市、東部は澗沼を隔てて東茨城郡大洗町、鉾田市、西部は笠間市に隣接している。また、ほぼ中央部を東流する澗沼川とその東に展開する澗沼によって、南北に二分されている。北部の台地は、標高 23 ~ 30 m の東茨城郡北部台地の先端部にあたり、北西から流れる澗沼前川に向かって大小の支谷が開口している。南部の台地は、西から大谷川、南から寛政川が澗沼に流入し、両河川の間に大小の支谷が樹枝状に台地の奥まで侵入している。北部台地に比べて起伏も多く、一層複雑な地勢を形成している。これらの河川流域の沖積低地は主に水田、台地は畑地・樹園地として利用されている。

地質をみると、台地を形成している最も古い地層は新生代第三紀の地層で、岩質は泥岩の水戸層と呼ばれている。また、水戸層の上には第四紀の地層が不整合に堆積している。さらに、粘土・砂からなる見和層、礫からなる上市層、灰褐色の常総粘土層、関東ローム層の順にほぼ水平に堆積している¹⁾。

当遺跡は町域北東部にあたる上石崎地区に位置し、澗沼川左岸に張り出した標高 9 ~ 10 m の舌状台地の縁辺部に立地している。今回の調査区は遺跡の南西部にあたる。調査前の現況は畑地である。

第2節 歴史的環境

向遺跡の周辺は、分布調査などにより多数の遺跡が確認されている。特に、澗沼と澗沼川を望む台地上には各時代の遺跡が分布しており、この地域が原始・古代から生活の適地であったことがうかがえる。ここでは、当遺跡周辺の主な遺跡を中心に各時代を概観したい。

縄文時代の遺跡は多数確認されており、中期を中心にほぼ全期にわたっている。早期では、澗沼南岸台地上で中石器遺跡(28)があり、沈線土器である三戸式や田戸式土器が出土している²⁾。前期は、片山遺跡(7)で、関山式、宮台遺跡(6)で黒浜式の土器がそれぞれ採集され³⁾、権現峯遺跡(36)⁴⁾や神谷東遺跡(38)⁵⁾、西台遺跡(40)⁶⁾では地点貝塚が形成されている。いずれもヤマトシジミを主体にマガキやハマグリといった汽水性の貝がみられ、縄文海進の影響がうかがえる。中期になると、宮後遺跡⁷⁾をはじめ、遺跡数は町内全域で増加する。後・晩期になると塚越遺跡、天古崎遺跡などがみられるものの、遺跡数は減少し、澗沼や澗沼川、澗沼前川周辺に分布するようになる。

弥生時代の遺跡は、中期後半の足洗式土器が出土した神谷東遺跡や西台遺跡などが知られている。澗沼周辺の台地縁辺部や河岸段丘上で確認されている⁸⁾。後期前半の東中根式並行の土器片が大畑遺跡⁹⁾から採集されているほか、後半には本県における標式土器となった長岡式土器が、長岡遺跡や奥谷遺跡、小鶴遺跡¹⁰⁾から出土している。また、平成 8 年度に調査された大畑遺跡¹¹⁾からは、十王台式期の集落が確認されている。

古墳時代の遺跡は、町域の西部にあたる澗沼川と澗沼前川両岸の台地上を中心に確認されている。石原遺跡¹²⁾

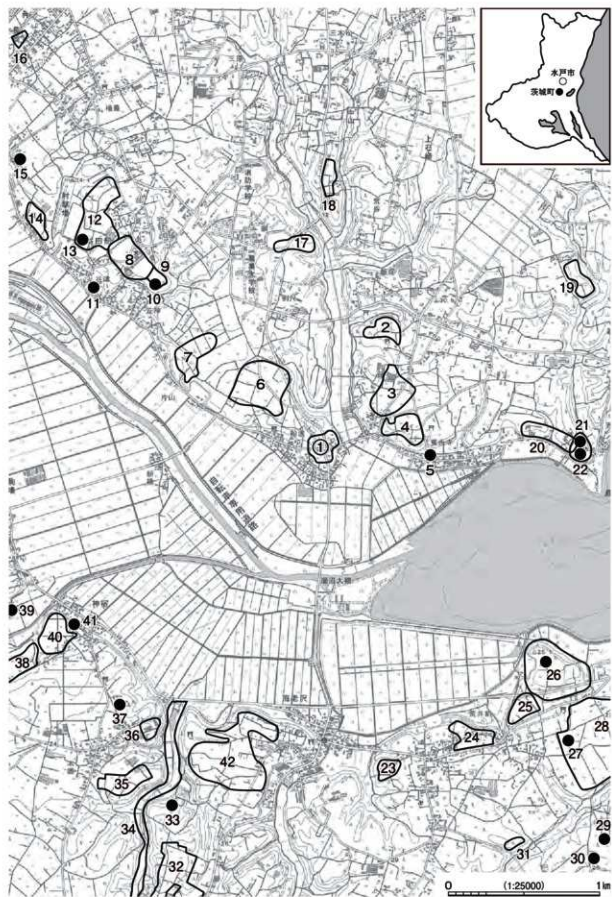
や矢倉遺跡¹³⁾、南小割遺跡¹⁴⁾などで、弥生時代から古墳時代への移行期の重要な遺跡が数多く確認されている。また、宝塚古墳¹⁵⁾や栗山古墳群¹⁶⁾、諏訪神社古墳群¹⁷⁾など、町域において大規模な古墳の築造が前期から後期にかけてみられる。当遺跡の周辺には殿部神社古墳(11)、塚越古墳(13)、前野南古墳(30)、真照寺古墳群(41)などが分布しているが、詳細は不明である。一方で、瀬沼周辺では、奥谷遺跡において古墳時代前期の豪族居館跡や集落跡が確認され、早くから有力者の拠点が構えられたと考えられる¹⁸⁾。また、国指定史跡小幡北山埴輪製作遺跡では、発掘調査により59基の窯跡や工房跡、粘土採掘坑などが確認された¹⁹⁾。製作された円筒埴輪や形象埴輪は町域の古墳のみならず、後期における霞ヶ浦沿岸の大型前方後円墳へも供給されている²⁰⁾。

当遺跡の所在する上石崎地区は、奈良・平安時代の茨城郡八部郷に比定されている²¹⁾。この時期の遺跡は当遺跡も含め、町内に広く分布しており、奥谷遺跡からは100点を超える墨書土器や円面硯、特徴的な横刀が出土したことから、官術的な施設をもつ集落であると想定されている。このほか、宮後遺跡²²⁾や大塚遺跡²³⁾から出土した「南主」、面山東遺跡²⁴⁾から出土した「土師神主」などの墨書土器も注目される。特に「土師神主」は、土師部の集団との密接な関連を示しているものであり、土師氏の祀る神(宮・社)に奉斎する神主を意味し、その神主の属人器であることを示している。また、かつて調査された向遺跡では、「向」と記された墨書土器が平安時代の竪穴建物跡から出土したとされている²⁵⁾。さらに、下土師東遺跡の9世紀前葉の竪穴建物跡からは、「大同三年正口」と記された漆紙文書が出土しており²⁶⁾、当地域が古墳時代に引き続き、有力者の地域支配の拠点であったと考えられる。

鎌倉時代以降になると、台地の先端部には谷田部城跡(9)、石崎城跡(21)、宮ヶ崎城跡(26)、宮ヶ崎館跡(27)、海老沢館跡(33)、天古崎城跡(39)など多くの城館跡が所在している。それらは、瀬沼川の支流の瀬沼前川や瀬沼に流れ込む寛政川や桜川などの小河川が、台地を刻んで河谷をつくり出した複雑な地形を利用している。谷田部城跡では、堅堀跡が確認されている²⁷⁾。また、宮ヶ崎城跡では、堀跡や溝跡などが確認されている。15世紀前半における江戸氏の水上交通を押さえるための拠点としての機能が指摘されており²⁸⁾、水上、陸上交通が交わる要衝であったことがわかる。

江戸時代には、交通の要衝としての性格がより一層高まり、町の中心部は南北に走る水戸街道に沿って長岡や小幡が宿駅として発展した。また、瀬沼南岸の海老沢は水上交通の要所として栄え、水戸藩をはじめ仙台藩など奥州諸藩と江戸を結ぶ物資輸送の中継地として重要な役割を果たした。さらに、当遺跡を含む「船渡」という地は瀬沼を隔てて、宮ヶ崎、海老沢、神宿と対峙する位置にあり、鎌倉時代以降の水運における重要な地域であったことを示している。江戸時代の上石崎河岸は、この船渡と推定されている²⁹⁾。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第1図及び第1表の該当番号と同じである。なお、本章は既刊の茨城県教育財団文化財調査報告第188集を基にし、若干加筆したものである。



第1図 向遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院25,000分の1「小鶴」に加筆)

第1表 向遺跡周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・桃山			江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・桃山	江戸
①	向遺跡	○		○	○			22	館ノ山古墳				○				
2	飯塚遺跡	○		○				23	随館遺跡	○		○					
3	片喰遺跡	○		○				24	毛戸遺跡	○		○	○				
4	東永寺遺跡	○	○	○	○			25	北宮遺跡	○		○	○				
5	東永寺横穴群				○			26	宮ヶ崎城跡			○	○	○	○	○	
6	宮台遺跡	○				○		27	宮ヶ崎館跡							○	
7	片山遺跡	○				○		28	中落遺跡	○	○	○	○				
8	鳩内遺跡	○				○		29	前野東遺跡	○				○			
9	谷田部城跡						○	30	前野南古墳				○				
10	鳩内古墳				○			31	前野遺跡	○				○			
11	殿部神社古墳				○			32	大道西遺跡	○		○	○				
12	塚越遺跡	○			○			33	海老沢館跡							○	
13	塚越古墳				○			34	勘十郎堀跡								○
14	上野堀ノ内遺跡					○		35	己た遺跡	○		○	○				
15	水戸浪士の毛塚						○	36	権現峯遺跡	○		○					
16	後久保遺跡	○						37	本郷十三塚							○	
17	伝習農場遺跡	○	○	○	○			38	神谷東遺跡	○	○	○	○				
18	中山台遺跡				○			39	天古崎城跡							○	
19	金沢遺跡	○	○		○			40	西台遺跡	○	○	○	○				
20	観沢遺跡	○	○	○	○			41	真照寺古墳群				○				
21	石崎城跡						○	42	海士部遺跡	○	○	○	○				

註

- 1) 日本の地質「関東地方」編集委員会「日本の地質3 関東地方」共立出版 1986年10月
- 2) 茨城町史編さん委員会「茨城町史 通史編」茨城町 1995年2月
- 3) 茨城町史編さん委員会「茨城町権現峯遺跡」茨城町史編さん委員会 1988年3月
- 4) 註3文献に同じ
- 5) 註3文献に同じ
- 6) 註3文献に同じ
- 7) 川又清明・野田貞直・吹野富美夫・浅野和久「やさしさのまち「板の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 宮後遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第188集 2002年3月
- 8) 註3文献に同じ
- 9) 長谷川聡「北関東自動車道(友部～水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大作遺跡・大畑遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第136集 1998年3月

- 10) 熊河和彦「一般国道6号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 奥谷遺跡・小鶴遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第50集 1989年3月
- 11) 註10文献に同じ
- 12) 村上和彦「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 石原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第163集 2000年3月
- 13) 飯島一生「北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 矢倉遺跡・後口原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第135集 1998年3月
- 14) 中村 敬治・江崎 良夫「茨城中央工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書 南小瀬遺跡・権現堂遺跡・萩塚古墳・後原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第129集 1998年3月
- 15) 茨城町史編さん委員会「茨城町宝塚古墳」1985年11月
- 16) 井博幸「茨城町諏訪神社古墳群・栗山古墳群の再検討」『優良岐考古』第33号 優良岐考古人会 2011年5月
- 17) 註16文献に同じ
- 18) 註11文献に同じ
- 19) 大塚初重・井上義安・青山敏明・白石真理「小幡北山墳輪製作遺跡 第1次～第3次確認調査報告」茨城町教育委員会 1989年2月
- 20) 伝田郁夫「霞ヶ浦高浜入り周辺の墳輪生産の展開とその特質」『戦国史学』第116号 戦国史学会 2002年8月
- 21) 註3文献に同じ
- 22) 川又清明・浅野和久「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 宮後遺跡3」『茨城県教育財団文化財調査報告』第241集 2005年3月
- 23) 長谷川聡・田中幸夫・小野克敏「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ 大塚遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第242集 2005年3月
- 24) 佐藤次男「面山東遺跡」茨城町史編さん委員会 1997年1月
- 25) 茨城町史編さん委員会「茨城町史 地誌編」茨城町 1993年3月
- 26) 芳賀友博・菊池直哉「下土師東遺跡 東関東自動車道水戸線（茨城南IC～茨城JCT）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第305集 2008年3月
- 27) 岡宮正光「谷田部城跡 埴内遺跡」茨城町教育委員会／山武考古学研究所 2008年2月
- 28) 野田良直「主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書2 宮ヶ崎城跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第141集 1998年9月
- 29) 註3文献に同じ「上石崎・助川公明家文書」などの記録から舟運が盛んだったことが窺える。佐竹氏の秋田移封の後、沼沼川流域一帯は、変わって転封してきた秋田氏の宍戸藩領となった。寛永5年（1628）の「ひるまか浦方津役之覚」『秋田家文書』（東北大学附属図書館蔵）によれば、沼沼の舟運によって、米、煙草、繰り綿、瀬戸物、塩、絹物、イワシ、酒、炭、油、茶、赤金、木綿、材木などが運送されていた。漁業としては、文化2年（1805）の記録によれば（「上石崎・助川公明家文書」）フナ、マス、マルタウグイ、ウナギなどを挙げている。また、潮の満潮によって海水が流れ込む汽水湖であるため、海からの上り魚として、スズキ、サケ、ボラ、シラウオ、ハゼを挙げている。

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

向遺跡は、東茨城郡茨城町の中央部に位置し、涸沼川左岸の標高約10mの台地上に立地している。調査面積は224㎡で、調査前の現況は畑地である。

調査の結果、土坑14基（江戸時代以降2、時期不明12）、溝跡1条（江戸時代以降）、柱穴列2条（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に2箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（壺）、土師器（坏・甕）、須恵器（坏・高台付坏・甕）、土師質土器（皿）、磁器（蓋）、土製品（土玉・管状土錘）、銭貨（元豊通寶）、鉄滓、自然遺物（貝殻）などである。

第2節 基本層序

調査区西部、標高約10mの台地上平坦面（G5b8区）にテストピットを設定し、基本土層（第2図）の観察を行った。

第1層は、黒褐色を呈する表土（現耕作土）である。粘性、締まりともに普通である。層厚は24～30cmである。

第2層は、黒褐色を呈する旧耕作土である。粘性、締まりともに普通で、層厚は18～29cmである。

第3層は、暗褐色を呈するローム漸移層である。粘性は普通で、締まりは弱く、層厚は10～24cmである。

第4層は、褐色を呈するソフトローム層である。粘性、締まりともに普通で、層厚は9～28cmである。

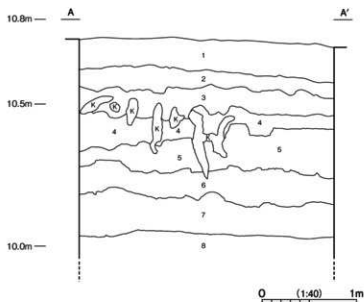
第5層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性、締まりともに普通で、黒色粒子を少量、白色粒子を微量含む。層厚は12～33cmである。

第6層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で、締まりは強く、白色バミス（バミ）を微量含む。層厚は15～18cmである。

第7層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性、締まりともに強く、小礫5～10mmを微量含む。層厚は24～36cmである。

第8層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性、締まりともに強く、小礫5～30mm、砂粒を微量含む。下層は未掘であるため、本来の層厚は不明である。

遺構は、第4層の上面で確認した。

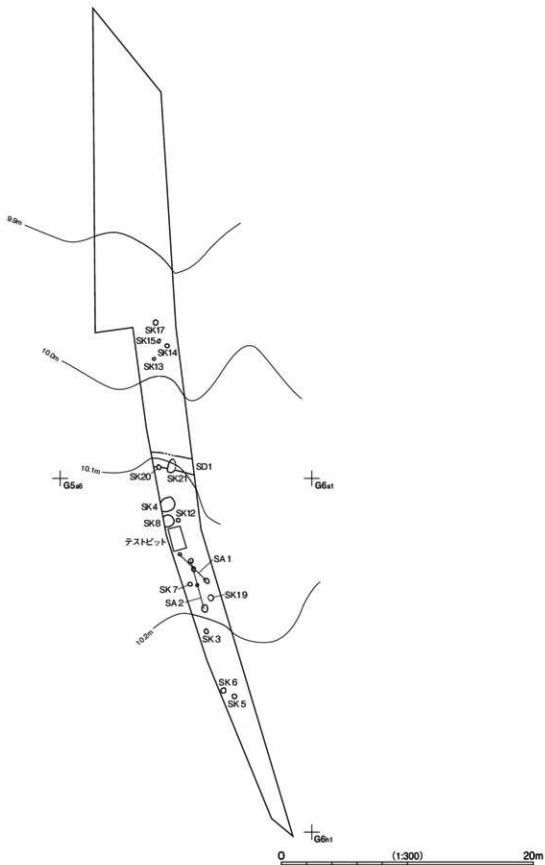


第2図 基本土層図（全体図参照）



+F5a6

+F6a1



第3図 向道跡遺構全体図

第3節 遺構と遺物

1 江戸時代以降の遺構と遺物

土坑2基、溝跡1条を確認した。以下、遺構と遺物出土状況について記述する。

(1) 土坑

第4号土坑 (第4図 第2・3表 PL 1~3)

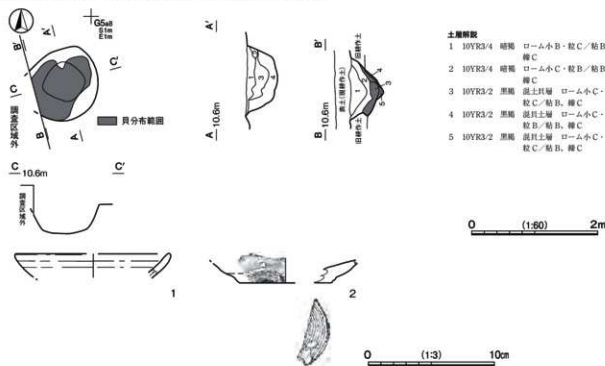
位置 調査区中央部のG 5a8区、標高10mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 西部が調査区域外のため、確認できた規模は南北径1.14m、東西径1.09mで、ほぼ円形と推測できる。深さは52cmで、壁は外傾している。底面は皿状である。

覆土 5層に分層できる。各層にロームブロックを含むことから、人為堆積である。また、第3層が混土貝層、第4・5層が混貝土層である。

遺物出土状況 土師質土器片7点(皿)、自然遺物(貝殻)31.200kg(ヤマトシジミ30.196kg、ハマグリ0.780kg、ヘナタリ0.224kg)が出土している。ほかに混入した縄文土器片1点、土師器片10点、須恵器片9点、土製品1点が出土している。1・2は第1・2層から、自然遺物(貝殻)は第3~5層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、基本層序の第2層(旧耕作土)を掘り込んでいることや、出土土器から16世紀末~17世紀前葉と考えられる。性格は貝殻を廃棄した土坑と考えられる。



第4図 第4号土坑・出土遺物実測図

第2表 第4号土坑出土遺物一覧(第4図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師質土器	皿	[122]	[20]	-	長石・石英・雲母	にぶい・黄褐色	良好	内外面ロクロナテ	覆土	5% PL.3
2	土師質土器	皿	-	[1.8]	[7.3]	長石・石英・雲母	にぶい・黄褐色	普通	体部下端回転ヘラナア 底部回転糸切り	覆土	10% PL.3

第21号土坑（第5図 第3表 PL2・3）

位置 調査区中央部のF58区、標高10mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号溝跡を掘り込んでいる。

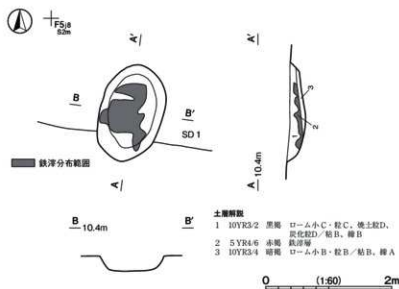
規模と形状 長径1.55m、短径1.00mの楕円形で、長径方向はN-10°-Eである。深さ12～24cmで、壁は外傾している。底面は南に向かって緩やかに傾斜している。

覆土 3層に分層できる。第1層はロームブロックや焼土粒、炭化粒を含み、第2層は鉄滓層、第3層はロームブロックを含み、硬化している。いずれも人為堆積である。

遺物出土状況 鍛冶関連遺物

（流動滓・椀状滓・鍛造剥片1,966.73g）が覆土中から出土している。椀状滓は遺存状態が悪く、図示できなかったが、写真のみ掲載している。ほかに混入した土師器片3点、須恵器片1点が出土している。

所見 時期は、江戸時代以降の第1号溝跡を掘り込んでいることから、近代の可能性が高い。性格は炉の痕跡が認められないことから、鉄滓などを廃棄した土坑と考えられる。



第5図 第21号土坑実測図

第3表 江戸時代以降の土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
4	G5a8	-	[四角]	1.14×1.00	52	外傾	鼠状	人為	土師質土器 貝殻	
21	F58	N-10°-E	楕円形	1.55×1.00	12～24	外傾	緩斜	人為	鍛冶関連遺物	SD1→本跡

(2) 溝跡

第1号溝跡（第6図 PL2）

位置 調査区東部から西部にかけてのF57～F58区、標高10mほどの台地平坦部に位置している。

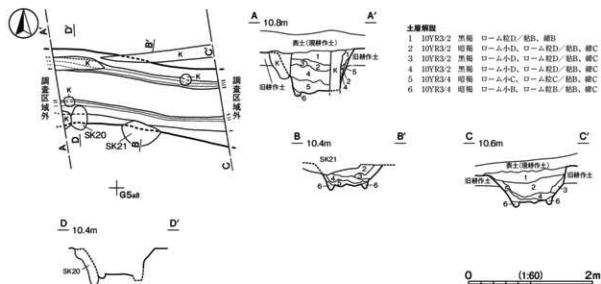
重複関係 第20・21号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 方向はN-79°-Wで、直線状を呈している。北東部・南西部ともに調査区域外に延びるため、確認できた長さは2.70mで、上幅108～125cm、下幅40～52cmで、深さ48～58cmである。断面形は逆台形形状を呈する。底面の標高は、西部の調査区域際が最も高く、東部に向かって10cmの標高差で下り傾斜している。両側の壁直下に幅10～15cm、深さ10～12cmの小溝が巡っている。

覆土 6層に分層できる。各層にロームブロックを含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況 混入した縄文土器片6点、土師器片6点、土製品1点が出土している。

所見 時期は、基本層序の第2層（旧耕作土）を掘り込んでいることから、江戸時代以降と考えられる。性格は両側の壁直下に小溝が巡っていることから、土留めの側板を伴った排水溝と推測される。また、土留めの側板を抑える杭穴がないことから、側板の上部に角材などを据えて抑えた可能性がある。



第6図 第1号溝跡実測図

2 その他の遺構と遺物

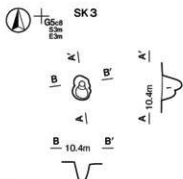
時代や性格が明確にできなかった土坑12基、柱穴列2条と遺構外出土遺物について記述する。

(1) 土坑

土坑12基は、実測図（第7図）と一覧（第4表）で記載する。

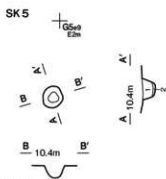
第4表 その他の土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形状	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
3	G 5d8	N-5°-W	楕円形	0.39×0.23	29	外傾	有段	人為	陶器	
5	G 5e9	-	円形	0.34×0.32	20	外傾	平坦	人為		
6	G 5e9	-	円形	0.43×0.40	65	外傾/直立	平坦	人為		
7	G 5c8	-	円形	0.32×0.31	24	外傾	皿状	人為		
8	G 5a8	[N-7°-E]	[円形・楕円形]	0.97×0.52	26	外傾	平坦	人為	土師器 須恵器	
12	G 5a8	-	円形	0.32×0.30	40	外傾/直立	皿状	人為		
13	F 5b7	N-51°-E	楕円形	0.29×0.24	48	外傾/直立	皿状	人為	須恵器	
14	F 5b8	-	円形	0.34×0.31	32	外傾	皿状	人為		
15	F 5b7	N-16°-E	不整楕円形	0.32×0.26	33	外傾/直立	皿状	人為		
17	F 5g7	-	円形	0.38×0.37	47	外傾	平坦	人為		
19	G 5c9	N-21°-E	[楕円形]	0.46×0.36	30	外傾	有段	人為	土師器	
20	F 5d7	N-15°-E	楕円形	0.40×0.25	58	外傾	有段	人為		SD1→本跡



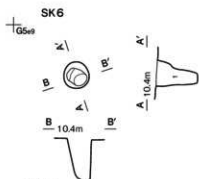
土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム小C・粒C、焼土粒D、炭化粒D / 粘B、雜C



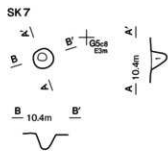
土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム小D・粒C、炭化粒D / 粘B、雜C
2 10YR3/3 暗褐色 ローム小C・粒C、炭化粒D / 粘B、雜A



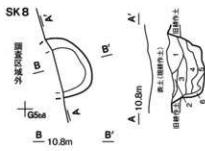
土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム小C・粒C、炭化粒D / 粘B、雜C



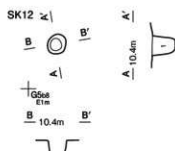
土層解説

- 1 10YR3/3 暗褐色 ローム小C・粒C、炭化粒D / 粘B、雜C



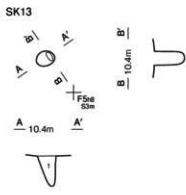
土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム小C・粒C / 粘C、雜C
2 10YR3/2 黒褐色 ローム小C・粒C / 粘B、雜C
3 10YR3/2 黒褐色 ローム小D・粒C / 粘B、雜C
4 10YR3/4 暗褐色 ローム小C・粒C / 粘B、雜C
5 10YR3/4 暗褐色 ローム小C・粒B / 粘B、雜C
6 10YR3/4 暗褐色 ローム小B・粒C / 粘B、雜C



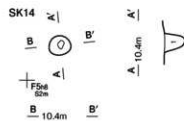
土層解説

- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム小C・粒C、炭化粒D / 粘B、雜C



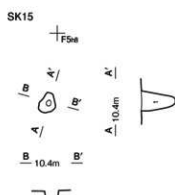
土層解説

- 1 10YR2/3 暗褐色 ローム小C・粒C、炭化粒D / 粘B、雜C



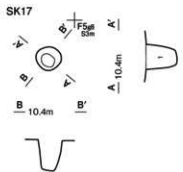
土層解説

- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム小C・粒C / 粘B、雜C



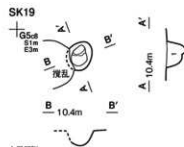
土層解説

- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム小C・粒C、炭化粒D / 粘B、雜C



土層解説

- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム小C・粒B / 粘B、雜C



土層解説

- 1 10YR3/4 暗褐色 ローム小B・粒B、炭化粒D / 粘B、雜C



土層解説

- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム小D・粒D、炭化粒D / 粘B、雜C

第7図 その他の土坑実測図

(2) 柱穴列

第1号柱穴列 (第8図 第5表 PL.2)

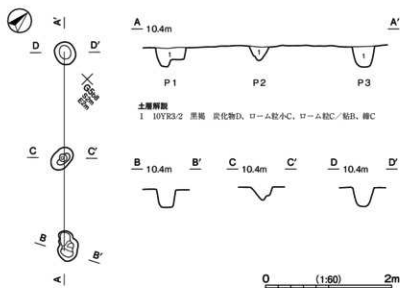
位置 調査区北東部のG5b8～G5c8区、標高10mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号柱穴列と重複するが、ビット同士の重複がないため、関係は不明である。

規模と構造 全長3.44m、配列方向はN-43'-Wである。柱間寸法は北西から1.68m、1.50mで柱筋は揃っている。

柱穴 3か所。平面は円形や楕円形で、長径0.36～0.48cm、短径0.27～0.32cmである。深さ20～34cmで、掘方の断面はU字状と有段である。第1層は柱抜き取り後の流入土である。

所見 時期と性格は不明である。



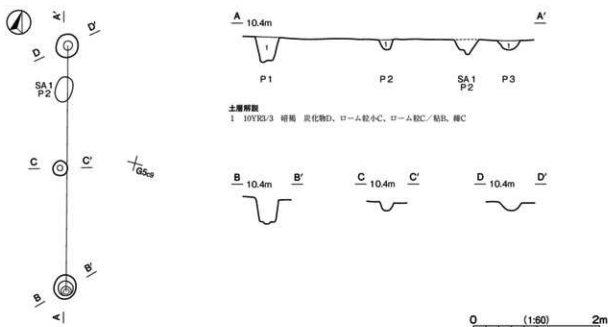
第8図 第1号柱穴列実測図

第2号柱穴列 (第9図 第5表 PL.2)

位置 調査区北東部のG5b8～G5c8区、標高10mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号柱穴列と重複するが、ビット同士の重複がないため、関係は不明である。

規模と構造 全長4.20m、配列方向はN-12'-Wである。柱間寸法は北西から1.94m、1.94mで柱筋はほぼ揃っている。



第9図 第2号柱穴列実測図

柱穴 3か所。平面は円形や楕円形で、長径0.24～0.38cm、短径0.22～0.36cmである。深さ15～40cmで、掘方の断面はU字状である。第1層は柱抜き取り後の流入土である。

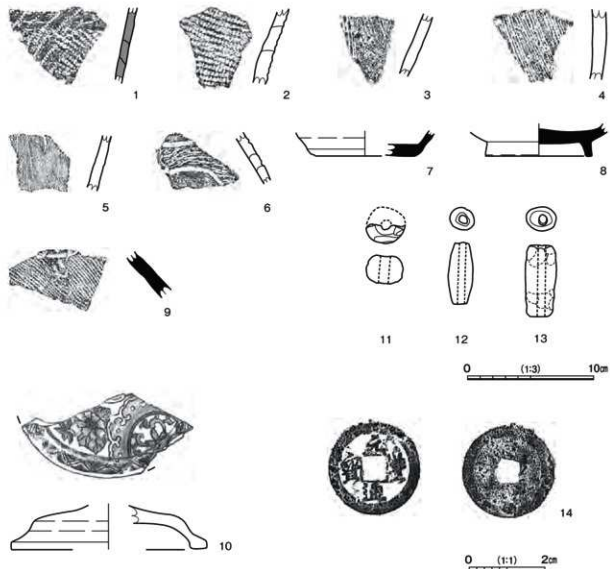
所見 時期と性格は不明である。

第5表 その他の柱穴一覧

番号	位置	配列方向	長さ(m)	柱間	柱穴				主な出土遺物	備考	
					柱穴数	平面形	長径(cm)	短径(cm)			深さ(cm)
1	G 5b8 ~ G 5c8	N-43°-W	3.44	1.50~1.68	3	円形・楕円形	0.36~0.48	0.27~0.32	20~34	-	
2	G 5b8 ~ G 5c8	N-12°-W	4.20	1.94	3	円形・楕円形	0.24~0.38	0.22~0.36	15~40	-	

(3) 遺構外出土遺物(第10図 第6表 PL 3)

遺構外出土遺物の主なものについて、遺物実測図(第10図)と一覧表(第6表)で掲載する。



第10図 遺構外出土遺物実測図

第6表 遺構外出土遺物一覧(第10図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考	
1	縄文土器	深鉢	-	(6.0)	-	長石・石英・雲母・ 磁石	内におい堀 / 外明堀	普通	縦位単筋縄文 LR・RL の羽状縄文	表土	5% PL 3	
2	縄文土器	深鉢	-	(6.2)	-	長石・石英・白色 粒子・磁石	におい黄堀	普通	縦位単筋縄文 LR	SK 4	5% PL 3	
3	縄文土器	深鉢	-	(5.0)	-	長石・石英・雲母	におい堀	普通	4条単位の縄歯状工具による縦位沈線文	表土	5% PL 3	
4	縄文土器	深鉢	-	(5.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	8条単位の縄歯状工具による斜位沈線文	表土	5% PL 3	
5	縄文土器	深鉢	-	(4.4)	-	長石・石英・雲母	におい黄堀	普通	縦位から斜位の3条単位の沈線文	SK 4	5% PL 3	
6	弥生土器	細口壺	-	(4.1)	-	長石・石英・雲母	におい橙	普通	褐色き区画文内細縄文光緒 輪積み痕	表土	5% PL 3	
7	須恵器	坏	-	(2.0)	(7.8)	長石・石英・白色 針状磁物	灰	普通	底面回転へう削り 内外面被熱痕	SK21	5%	
8	須恵器	高台付坏	-	(2.6)	(8.4)	長石・石英・白色 針状磁物	灰	普通	体部下端回転へう削り 高台胎付	SK13	10% PL 3	
9	須恵器	羹	-	(3.7)	-	長石・石英・白色 針状磁物	灰	普通	体部外面並行明き	表土	5% PL 3	
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	特徴	胎土	産地	出土位置	備考
10	磁器	蓋	(5.2)	(1.2)	-	磁石 明オリゾウ灰	印刷手	口縁部半花菱文 体部花唐草文	透明釉	肥前	表土	25% PL 3
番号	器種	長さ・径	幅	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考		
11	土玉	2.2	(2.9)	(0.8)	(8.8)	長石・白色粒子	橙	十字調整 一方内からの穿孔	SD 1	PL 3		
12	管状土師	4.9	1.9	0.6	15.21	長石・白色粒子	赤褐	磨き調整 一方内からの穿孔 黒斑あり	SK 4	PL 3		
13	管状土師	5.6	2.7	0.6~0.7	31.37	長石・石英・雲母	明褐	十字調整 一方内からの穿孔 磨頭痕	表土	PL 3		
番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考		
14	元豊通寶	2.4	0.7	0.2	3.56	銅	1078	行書体 背面無文 両面僅付着	SK 2	PL 3		

第4節 総括

1 はじめに

今回の調査で、土坑14基、溝跡1条、柱穴列2条を確認した。ここでは、主な遺構の性格と出土遺物についてまとめる。

(1) 土坑について

土坑は、調査区内のほぼ全域から散在した状態で確認した。形状は楕円形のもの、ピット状のものに分かれる。出土遺物から性格が推測できた土坑は第4・21号土坑である。第4号土坑は、ヤマトシジミ(約30kg)を主体とした貝殻を廃棄した土坑で、湖沼や湖沼川に近い環境にあることから、沼や川で採取したそれらの貝殻をまとめて廃棄したと考えられる。土師質土器の皿2点のほかに混入した縄文土器片、土師器片、須恵器片、土製品が出土している。時期は、出土土器から16世紀末～17世紀前葉と考えられる。第21号土坑は、鉄滓や鍛造剥片などを廃棄した土坑で、調査区域外での小鍛冶炉の存在が窺われる。本跡は江戸時代以降の第1号溝跡を掘り込んでいることから、時期は近代の可能性が高い。

(2) 出土遺物について

後世の遺構覆土や遺構外からは、縄文土器片、弥生土器片、土師器片、須恵器片、磁器片(蓋)、土製品(土玉、管状土鍾)、銭貨(元豊通寶)が出土しているが、今回の調査では縄文時代～平安時代までの遺構は確認できなかった。縄文土器片の時期は、前期中葉(黒浜式)、後期前葉(称名寺式)、後期後葉(加曾利B式)である。弥生土器片の時期は、中期後半(足洗式)、土師器片と須恵器片の時期は、8世紀後葉～9世紀前葉である。注目すべき遺物としては、土玉と管状土鍾の出土が挙げられる。近年、佐々木義則氏によって、分類とその用途についての研究がなされている¹⁾。形状分類は球状・管状・細形に、重量は大型・Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類に、長さの違いによりA・B・Cに細別している。それを基に分類すると、11(第10図)は径と重さから球状土鍾Ⅱ類に、12(第10図)は細形管状土鍾Ⅰ類になり、用途はコイ、フナ、ニゴイ、ナマズなどを対象とした刺網漁に使うものとなる。また、13(第10図)は管状土鍾ⅠB類になり、湖沼沿岸部の葦場に産卵のために集まるコイやフナを囲み捕るための開網漁に使うものになる。

2 おわりに

今回の調査で、汽水産の貝殻や鉄滓などを廃棄した土坑、溝跡などを確認した。しかし、時期を特定できる遺物が少ないことや調査区が狭小なことから、詳細な時期や性格を捉えることはできなかった。遺構外からではあるが、縄文時代と弥生時代、奈良・平安時代以降の遺物が出土している。奈良・平安時代の土玉と管状土鍾の存在から、付近に湖沼、湖沼前川、湖沼川が存在する豊かな自然環境の中で、古代から漁撈を産業とする人々の存在も認められる。さらに今後の調査によって、当地域の歴史が明らかになることを期待したい。

註

1) 佐々木義則「茨城県における奈良・平安時代漁網鍾の分類とその用途」『優良岐考古』第38号 優良岐考古同人会 2016年5月

写 真 图 版



調査区全景 (鉛直)



遺跡遠景 (西から)



調査区近景 (北から)



第4号土坑 土層断面



第4号土坑 遺物出土状況



第4号土坑



第21号土坑 土層断面



第21号土坑 遺物出土状況



第21号土坑



第1号溝跡 土層断面 (東から)



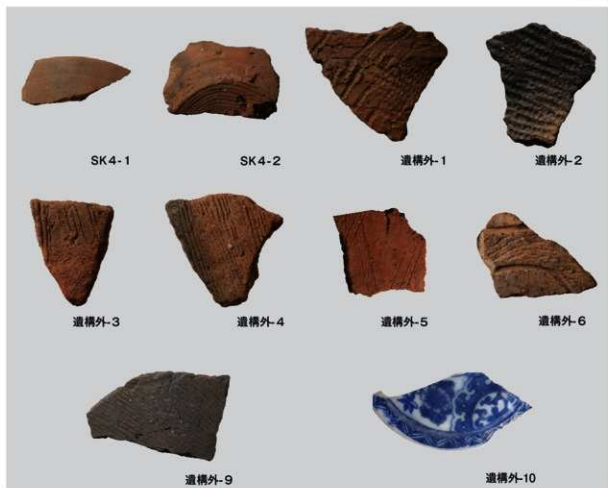
第1号溝跡



第1号柱穴列



第2号柱穴列



第4・21号土坑・遺構外出土物

抄 録

ふりがな	むかいいせき								
書名	向遺跡								
副書名	主要地方道水戸神橋線交差点整備事業地内埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第472集								
著者名	近江屋成陽 市毛美津子								
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587								
発行日	2024(令和6)年2月26日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
向遺跡	茨城県東茨城郡 茨城町大字上石崎 字上ノ坪2314-2 番地ほか	08302 1 191	36度 28分 62秒	140度 46分 39秒	10 m	20200401 ～ 20200531	224 m ²	主要地方道水戸神橋線交差点整備事業に伴う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
向遺跡	包蔵地	江戸時代以降	土坑 溝跡		土師質土器(皿) 鍛冶関連遺物(流動滓・椀状滓・鍛造剥片) 自然遺物(ヤマトシジミ・ハマグリ・ヘナタリ)				
	その他		土坑 柱穴列		縄文土器(深鉢)、弥生土器(壺)、土師器(坏・甕)、須恵器(坏・高台付坏・甕)、土師質土器(皿)、磁器(蓋)、土製品(土玉・管状土錘)、銭貨(元豊通寶)				
要約	江戸時代以降の貝殻と鉄滓をそれぞれ廃棄した土坑や、排水施設と考えられる溝跡などを確認した。遺構外出土遺物には、縄文時代から江戸時代のもが見られ、断続的な土地利用の痕跡を垣間見ることができた。								

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 10 Pro
	編集	Adobe InDesign 2023
	図版作成	Adobe Illustrator 2023
	写真調整	Adobe Photoshop 2023
	Scanning	RICOH imagio MP W4001
使用Font	OpenType	リュウミンPro L-KL、太ゴB101 Pro Bold 中ゴシックBBB Pro Medium
写真	線数	カラー-210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign 2023 でデータ入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第472集

茨城町

向 遺 跡

主要地方道水戸神栖線交差点整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

令和6（2024）年 2月26日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <https://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 株式会社高野高速印刷

〒310-0853 水戸市東原2-8-1

TEL 029-231-0989